

いたちかわらばん

通刊52号 鮒川・狹川 / 川原番・瓦版 11冬号



【宗森英夫】

【カワセミ】

川あそび

栄区のシンボルとして区民に親しまれているいたち川は、三十三年前栄区に越して来た時、川には自転車や洗濯機などいろいろの物が捨てられていました。それに、本郷中学校の近くの川底から黄燐が発見され、新聞にも大きく取り上げられていました。その当時のいたち川はドブ川で、まったく無関心の状態で過していました。

故郷の熊本では、菊池川、白川、緑川があり、少年の頃よく遊んだ川は、緑川です。真白な砂浜がどこどこにあり、テナガエビ、アユ、ハヤ、ボラがたくさんいて、一時間くらい潜れば、テナガエビをバケツに一杯獲れました。

現在、この川の周辺に近代化が進み産業経済の変化によって、汚水が川に流れ込み、川の自浄作用が低下し排水の臭いが漂い、あの美しい白い砂浜は消えてしまいました。

横浜市では、よこはまの川を、①大変きれいな川、②きれいな川、③やや汚れている川、④よごれている川、の四つに分けていますが、行政や市民の協同作業の努力によって、いたち川は、「汚れている」から「きれいな川」になり、子供たちが泳げる川に成っています。これからも、上流から下流まで「大変きれいな川」、いたち川になる様活動を続けて行きたいと思っています。

そして故郷の川も昔の様な川に甦ってくれることを、遠い空から願っています。

(ケンちゃん)

いたち川はたからもの

横浜市立上郷小学校

●総合学習のスタート

上郷小学校の3年生は総合学習で「いたち川はたからもの」をテーマに、いたち川の生き物や環境、川の成り立ちなどについて調べています。5月に社会で学区を探検し、いたち川の自然の豊かさにほんの少し触れていました。

9月にこの学習をするにあたって、キャリアコミュニケーションの和久井さんに相談に乗っていただき、子どもたちに水の大切さや今のいたち川になるまでの過程を分かりやすく話していただきました。特に子どもたちが目を輝かせて聞いていたのは、川に棲む生き物の話です。いたち川には様々な生き物が棲んでいることを知り、子どもたちのいたち川への思いはさらに深まりました。

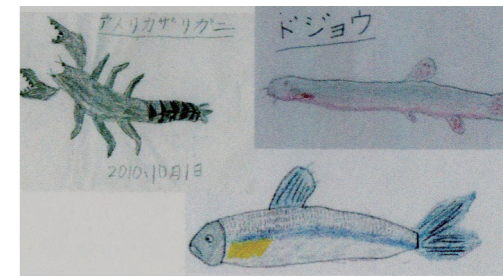
●五感を使って川のよさを感じよう

「とにかくまずは、川に出向いて川のにおいや音、冷たさ、川のよさを五感で感じてみよう」という和久井さんの言葉に、子どもたちも大喜び。9月下旬のようやく夏の暑さが終わったころ、子どもたちと川に出向きました。「きゃあ、冷たい！気持ちいい～！」あちらこちらから楽しそうな声が聞こえてきました。

「ドジョウが採れた！」「アメンボがいたよ！」子どもたちが目を輝かせながら、次から次へと捕った魚たちを持ってきました。網を使って魚を捕るのは初めてという子どもたちも、服が濡れることも気にせず夢中になって魚を追いかけていました。

●捕れた捕れた！たくさんいたよ！

和久井さんのお話通り、いたち川には様々な生き物が棲んでいました。この日捕まえた生き物だけでも、アメリカザリガニ、カワニナ、オイカワ、アブラハヤ、ドジョウ、サワガニ、ヌカエビ、ヤゴ、ブラックバスもいました。絶滅が危惧されているホトケドジョウも見ることができて、大喜び



上 子どもの生き物図鑑より
下 上郷地区センター近くのいたち川での川遊び体験学習風景

の子どもたちでした。よく観察した後、また川に戻りました。

生き物の多さはもちろんのこと、川底のぬるぬるとした感触や流れる水音、川岸に生える植物の多様さに、子どもたちは改めていたち川の自然の豊かさを感じることができたようです。

学校に戻り、早速いたち川の生き物図鑑を作り始めました。生き物が棲みやすい川にするために、私たちには何ができるのか、子どもたちと共に学んでいこうと思います。

いたちかわらばん 50号発刊記念原画展

栄区のシンボルリバーとして親しまれている「いたち川」の情報発信として発行してきた「いたちかわらばん」が2010年夏号をもって、通刊50号になりました。発刊50号を記念し、每号表紙を飾る木版画の原画展を開催します。

みなさま、ぜひお越しください。

◇期日/平成23年1月5日～10日 9時～17時

5日は13時～17時、10日は9時～16時

◇会場/栄区民文化センター・リス

◇入場料/無料

◇展示内容/原画、いたち川に関する資料 など

発行年月
2010年12月

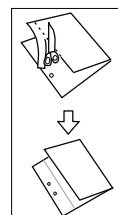
通刊52号

発行: 狹川 OTASUKE隊 (いたちがわおたすけたい)

OTASUKE隊事務局: 栄区役所区政推進課企画調整係 〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19
TEL 045-894-8161 FAX 045-895-2260
栄土木事務所下水道・公園係 〒247-0007 横浜市栄区小菅ケ谷1-6-1
TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421
(お便り・お問い合わせは こちらまで)

切り取り線

この部分を切り取ってファイルにすると便利です



河川改修の歴史に名を残すいたち川

いたち川は、3面コンクリート護岸のまるで排水路のような治水至上主義だった都市河川改修を、多様な生物が生息できる多自然型改修に変えた日本で最初の川です。この多自然型工法あるいは近自然工法という河川改修は、1970年代にヨーロッパで生まれましたが、流れの急な日本の河川には適さないものでした。

そこで、いたち川の改修では様々な工夫を凝らした独自の工法を多数採用して、いわば日本型多自然工法とでもいうべき方法を編み出し、日本の多自然型河川改修の礎（いしずえ）を築いた歴史的な川なのです。

ところで、改修前1970年代前半までのいたち川は、写真1のようにしばしば氾濫する暴れ川でした。当時の川幅は海里橋下流地点でもわずか3m程度しかなかったのです。

ですから、とにかく洪水対策が急務でした。1970年に都市小河川改修費補助事業制度の対象に指定され、さらに1976年横浜市費単独による浸水常襲地域における河川の暫定改修によって、排水をよくするために写真2のように川幅の拡張と蛇行する流路の直線化がな

されました。
このいわゆる一般的河川改修によって洪水の被害は激減しましたが、平常の水位は10cm以下になり夏場の水温は30°C以上になって、魚類や水生昆虫が棲めなくなり、当時の下水道の一部未整備も重なって水質は汚濁しました。するとゴミも投棄されやすくなって、まるでドブ川ようになってしまったのです。

そこで、1987年の「ふるさとの川モデル事業」の創設にともなっていたち川がモデル河川に指定され、ついで1989年に「ふるさとの川モデル事業」として認定されたのを機に、全国に先駆けて先行モデルのない多自然型改修に挑戦し、様々な困難をひとつずつ解決しながら、治水と多自然環境を両立させることに成功したのです。同時に下水道の整備も進み、水質が飛躍的に向上して、写真3のように多くの市民に憩いの場を提供する現在の姿になりました。

以上の経緯により、いたち川には今でも国の内外から取材や視察が絶えません。正確な記録はありませんが、1993、4年頃は当時の建設省はじめ国や全国の自治体、大学、研究所などから毎年1000人以上の見学や視察、取材があったとのこと。最近は国内からの取材や視察は一段落しましたが、日本と似て急流の多い韓国からの取材や視察はその後も続いているようです。栄土木に記録が残っている

ここ数年の主なものを掲げると以下のとおりです。

- 2008.04 韓国SBS（放送局）取材
- 2008.08 NHK取材
- 2009.07 韓国KDI研究委員視察
- 2009.08 国土交通省
- 2010.08 韓国アリランTV取材
- 2010.09 韓国京畿道水質改善部視察
- 2010.10 韓国大邱市視察団

以上のように、栄区のみなさんにとって身近ないたち川は、じつは、日本の河川改修史に名を残すきわめて重要な川なのです。誇りをもっていたち川の良い環境の維持向上に協力しようではありませんか。

なお、いたち川の多自然型工法の詳細は、すでにこの「いたちかわらばん」41、42、44、46、47号の5回にわたって、当時横浜市の担当技術者として実際の工事に携わった現OTASUKE隊会員の水人子（ミジンコ）さんが紹介しました。見逃した方は栄区役所のホームページ内にWeb版がありますので参照してください。
(一竿)



写真1 (公田交差点付近)



写真2 (城山橋から下流を望む)



写真3 (新橋から上流を望む)



写真4 (NHKの取材風景)

南米チリ原産で、アフリカや大洋州で帰化している越年生草本。日本へは嘉永四年（一八五二）に観賞用として渡来したが、その後各地で野生化した。現在では北陸・関東地方北部以西に分布し、海岸、河原の砂地にしばしば大群落をつくる。

全体に粗毛を布き、茎はまばらに分岐して高さ1メートルに達する。葉はまばらな鋸歯のある広線形で先端は尖る。茎生葉は無柄、根生葉とともに中肋部が白くなる。花は濃黄色の四弁花で直径約八センチ、夜咲きで開花後には赤味を帯びる。

似たような仲間にはマツヨイグサ、オオマツヨイグサ、コマツヨイグサ、アレチマツヨイグサがあるが、いずれも帰化植物で、いたち川周辺で見ることが出来る。

マツヨイグサ



いたち川で見られる帰化植物 14

駅前一角のまぶしいほどの照明とは対照的に、ろうそくのやわらかな光の中でひと時をゆったりとした気分イベントを楽しもうという今回の企画は、子どもの塗り絵とろうそく、森づくり活動団体の展示出品、ミニコンサート（tomokoさん、おかりな・ごるちえ、鎌倉女子大学音楽セミ）の参加など、回を重ねるごとに内容も充実してきました。

夕暮れの五時、キャンドルに灯りがともされると暗闇の中にいっせいに浮かび上がる五百個の装飾されたベットボトル、竹のアート。駅の改札から出てくる通勤帰りたちも立ち止まりキャンドルアートに見入っています。

オカリナやステイールドラムの澄んだ音色やtomokoさんの味わい深い歌声が夜の静寂の中に流れるひと時でもありました。

夕暮とろうそくの明かりが創り出す自然と一体となった演出は素晴らしいものでした。年々展示品も訪れる人も多くなり栄区年間のイベントとして確実に定着したようです。
(ワンダー谷溪)

ろうそくのやわらかな光の中でひと時をゆったりとした気分イベントを楽しもうという今回の企画は、子どもの塗り絵とろうそく、森づくり活動団体の展示出品、ミニコンサート（tomokoさん、おかりな・ごるちえ、鎌倉女子大学音楽セミ）の参加など、回を重ねるごとに内容も充実してきました。



夏至と冬至の日、二十時〜二十二の二時間だけ、電気を消して過ごそうというキャンドルナイトは、エコ・環境啓発活動として日本各地で開催されています。
栄区でも二〇〇五年から毎年本郷台駅前広場で開催されてきました。これまでは夏の開催が多かったのですが今年は十一月二〇日に開催されました。